

「えー、そうかい、悪いね。今晚、ポカンとやっとくから、ごめんね」おばさんは、こぶしを握って息を吹きかけた。

「ねえ、おばさん、雄ちゃん、何か言ってた？」

「え、ああ」おばさんは、にやつと笑うと「転校生で高井くんっていう子がいるんだって？」と、聞いてきた。

「う、ううん」

「雄二が言うには、ブンちゃんがその子の肩ばかり持つて膨れてんだ。男のくせにヤキモチ焼いてんだね、あの子は」

ヤキモチって。そう言われるとなぜか気恥ずかしい。

「ほら、雄二はブンちゃんのこと好きだから」

大好きはどうか。でも、いつも一緒だったし、楽しかったことは間違いない。時々、面倒くさい存在ではあるけど。

「他には？」

「え、他に。いいや別に何も言つてなかったけど。何かあったの？」

逆に聞かれて、僕は大きく頭を振った。雄ちゃんは、僕が家の仕事をばかにしたことは黙っていたんだと察した。

「おばさんさ、雄二がブンちゃんみたいな子と友達になれてよかったって思ってたよ。あれはブンちゃんと違って頭が悪いからね。普通は相手にされないじゃない？それに、ほら、うちの仕事はね。キ随分、学校とかでからかわれてるんだろし、雄二にはいやな思いをさせてるんじゃないかってさ。なのに、ブンちゃんは仲良くしてくれて」

そう言われると、^{II}後ろめたい気持ちになる。

「親として負い目があるもんだから、ねだられたら新しい自転車なんか買つてやつたりして。ブンちゃんなんか中学までちゃんと待つてゐるのに。甘やかし過ぎだね」

確かに物は買つてもらつてゐると思うけど、おばさんのしかり方を知つてゐると甘やかしてゐるようには思えない。ただ僕だって、もしねだつて買つてもらえるなら何でも買つてもらいたい。

「親なんて、みんな自分の子どものことが心配でさ。ブンちゃんちだつて同じでしょ」

「うちの親は違うけど……」僕は小さく頭を振つてため息をついた。

「そんなことないよ。ブンちゃんのこと気にかけてるつて。子どものことを心配しない親なんていやじゃないよ。当たり前じゃないか。でも、いいよね、ブンちゃんは勉強ができるから。自慢の息子だ。^{III}鼻が高いだろうね。あ、こんなこと言うから、雄二がひがむんだね、ははは。でも、あれでいいこともあつてさ。勉強がためだからつて別のことで目立って、あたしを喜ばせようとしてたりするし。ま、運動会の駆けっこくらいなものだけさ」

普段おちやらけた雄ちゃんが運動会の^⑧トキヨウソウだけは^⑨シンゲンになるのは、¹⁰そういう訳もあるんだ。おばさんは雄ちゃんのことを可愛くて仕方ないのだから。うらやましさと少しの嫉妬を感じた。

「あ、ごめんね。ついつい、つまらないことばかりしゃべっちゃつて。でも、あんなばかだけど、ブンちゃん、見放さないでね。中学校は一緒だけど、あの頭じゃ、ブンちゃんと同じ高校は受からないだろうし、もし別々になつてもかまつてやつて。ずっと一生、つきあつてやつてね」知らないとはいへ、息子にひどいことを言つた僕に、一生、友達でいてやつてくれと頭を下げる¹¹おばさんの姿に、心の底からすまない気持ちちがわき上がってくる。

「おばさん、雄ちゃんのことぶたないでよ。オレも悪いんだ」

僕はそう言つて玄関の外に出ると、二階の窓に向かって声を掛けた。

「雄ちゃん、明日、登校日だな」返事はなかった。「じゃあ学校でな」開け放された雄ちゃんの部屋の窓に、風になびくブルーのカーテンが見えた。僕は自転車にまたがると、もう一度雄ちゃんの部屋を見上げた。窓の縁の所に手が掛かるのが見えた。するとゆっくり頭が出てきて目の高さで止まった。¹²隠れながら僕を見ているつもりなんだろうけど、バレバレだ。「じゃあな」僕は後ろ向きに手を振った。

雄ちゃんちからの帰り道。ふと遠回りして、両親が働いている工場に立ち寄ろうかな、と思つた。雄ちゃんのかあちゃんの話聞かされて、親がなんとなく恋しくなつたからだ。胸の奥がむずがゆいような、なんか妙な気分だ。猛スピードで国道を西に向かった。掘つ建て小屋の工場が見えてきた。僕は自転車をトタンの壁に立て掛けた。

「お盆明けまで？ そりゃあ、無理だ」正面に回ろうとしたとき、工場の中から父の大声が聞こえ、僕はひるんで足が止まった。「え、はい。そうですか。じゃあ、なんとかしますよ。はい、はい。そういうことで」チン。受話器を置く音が聞こえた。僕は、壁を背にして、そのままそこに腰を下ろして身をく潜めた。

「何だつて？」母の声だ。

「お盆明けまでに、全部納入しろだよ。ふざけんなつてんだ。お盆明けてことは、こつちは休みなしで働けてことだろ。まったくよ、ヤツらはお盆は休むだろうが」父は相当怒つてゐる。どうやら今夜は近寄らない方がよさそうだ。もうこのままここを離れよう。

「オレだつて、あいつらを遊びに連れてつてやりてえさ。だけど、仕事がなくなつちまつたら、うちはやつてけねえぞ」

「そうだね」

「農業やつてたつて、喰うだけしかかせげねえから始めた仕事だ。それに近所だつて、みんなうちを新しくしてゐる。オレだつて、うち建てるのが夢なんだからな。それには今、^ケ我慢して働くしかねえだろ。かせいでうち建てたら、あいつらにだつて部屋も持たしてやれるし、新しい机だつて椅子だつて、全部そろえてやる。誰にも文句は言わせねえ」

「ホントだね。だけど、いつになつたら楽になるのかね。あの子たちには、こういう思いをさせたくないけど。この先、どうなることやら……」

母が最後に大きなため息をつくのが分かった。

「オレだつて、あいつらの将来のことを考えてねえ訳じゃねえさ。文弘のヤローは、じいさんに似たんだろ、頭のできがいい。だつたら、いい大学だつて行かしてやりてえしなあ」

「あれ、工場、継がせる気じゃなかったのかい？」

「こんなもんやつたつてしよがあるめえ。あいつがホントにできがいんなら、^コ下請けみてえにペコペコ頭下げる側じゃなくて、下げさせる方になんきや意味がねえんだ。それには大学くらい出してやんねえと。あいつにはいやな思いはさせたくねえ。なのによ、まったく。親の心子知らずだ。あのヤロー、歯向かつてくるばつかりだ」

オレつて期待されてるんだ……。あのうちやんが、オレに……。

「ちゃんと¹³そういう気持ちを話せばいいんだよ。もう、ごまかしとか利かない年なんだから。いつまでも文弘だつて子どもじゃないよ」

「そりゃあ、そうだろうが」

「うちやんが、ぶつきらばうに接するからじゃないのかい？ 不器用なんだから」

「そんなことはねえさ」

「まったく、親子して反抗期かい。どうしようもないね、ははは」

両親の話を^⑩又スミ聞きしてゐるうちに、むずがゆかつた胸の奥が、¹⁴次第に苦しくなつてきた。『子どものことを心配しない親なんていやしないよ』雄ちゃんのかあちゃんに言われた言葉が聞こえた気がした。なんだか急にすまない気がした。自分でもよく分からないまま、いてもたつてもいられずに、僕は立ち上がると、熱気のこもつた工場の中に入った。

「あれ、フミ。何しに……」段ボールの裁断屑を集める作業をしていた母が僕に気づいて声を掛けた。僕は母に答えることなく、屑を表にある屑山に運び始めた。今の僕にはそれくらいのことしかできないんだ。

「何やつてるつ」父がどなった。

「手伝う」僕はひと言だけ答えると、また屑を力力えて表に運んだ。

「何が手伝うだ、邪魔だから帰れつ」と父が大声を上げる。

それでも構わず、また両手いっぱい力力えろと屑山に運ぼうとした。

「余計なことをするなつ」いら立つた父は僕に近づくと、僕の首根っこをつかんで工場の外へ連れ出し、突き飛ばした。僕はまうしろに尻餅をついた。転んだ勢いで屑が宙に舞う。僕はひざをついて地面にはいつくばると、散らばつた屑をかき集めた。

「さつさと帰つて勉強でもしろつ」

「たまには手伝えつて言つたじゃねえかつ」

拾つた屑を屑山に捨てると、僕はまた工場の中に戻ろうとした。

「親の言うことが聞けねえのかつ」父は僕を捕まえると、もう一度、そしてさつきより強く突き飛ばした。今度はヘッドスライディングをするように、僕は地面に横倒しに転んだ。

「とうちゃん、人通りがあるんだから、やめなよ」母が駆け寄つて、僕のズボンの汚れを叩いた。

「フミも、いったいどうしちゃったんだい？ 何があつたんだい？」

僕はそう問い掛ける母の手を振りほどいて、工場の中へ向かった。

「しつこいヤローだなつ」と、父にまた突き飛ばされても、今度はよろけただけで転ばなかった。工場の中へ戻ろうとする僕の前に父は立ちはだかつて、前に進もうとする僕を押し戻した。僕はこらえきれなくなつた涙をこぼしながら「手伝うんだつ」と、足を踏ん張つた。

「とうちゃん、手伝うつて言つてんだから、好きにさせればいいじゃないの。そういうところが不器用つて言うんだよつ」

母がふたりの間に割つて入り、もみ合いになる。母が父の手を僕から放そうとしたとき、バランスを失つた父が尻餅をついた。

「まったく、¹⁵親子でばかんだから」母があきれたように言う。

「手伝うんだ……。手伝うんだ……。僕は呪文のように、その言葉を繰り返した。父はゆっくり起きあがつて「バカヤロー。勝手にしろつ」と言うのと、それ以上は何も言わず、背を向けた。母は僕の前にしゃがむと、服に付いたほこりを叩きながら「お前だつて、なんでそんなに手伝いたのか、訳を言わなきゃ分からないだろ」と言つた。

僕は全身を震わせながら嗚咽した。それでも母の問いに答えずに、工場の中に入った。涙と鼻水でぐちゃぐちゃになつた顔を手の甲でぬぐいながら、僕は裁断屑を何度も何度も屑山へ運んだ。

問1 ア、コの漢字の読み方をひらがなで書きなさい。

問2 ①～⑩のカタカナの部分に漢字に直しなさい。

問3 1 「基地」は「僕」にとってどのような場所ですか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 自分だけの力で作り上げた、誰にも渡したくない秘密の場所。
イ 中に入ると子どもの頃の懐かしい思い出がよみがえってくる場所。
ウ 怒られたときや腹が立ったときに入り、ひとりになって落ち着ける場所。
エ いやな思い出が次々とわき起こってくるので、なるべく入りたくない場所。

問4 2 「父は頑として受け入れなかった」とありますが、それはなぜですか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 聞き分けのないわがままな子どもに腹が立ったから。
イ いつも孫に甘い祖父母たちに腹をすえかねていたから。
ウ 無理なものは無理だと子どもにはわかっていたから。
エ いった自分ですぐ新しい机を必ず買ってやるつもりだったから。

問5 3 「僕は絶対に、こんな机は使わないと決め」とありますが、この時の「僕」の気持ちを説明したものと最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 約束を破った父親の言うとおりにしないと反発している。
イ 父親から謝ってくるまで絶対にゆずらないと興奮している。
ウ 机なしでも勉強できることを証明しようといきこんでいる。
エ 一度使ったら誰も新しい机を買ってくれないとおそれている。

問6 4 「あれま、すっかりした物言いだね」とありますが、①「祖母」が「しつかり」していると感じたのは、「高井」のどのような点ですか。三十文字以内で具体的に答えなさい。

② ①以外に「高井」の「しつかりした」ようすをうかがわせる行動を本文一枚目から一文でぬきだし、最初の五字で答えなさい。

問7 5 「みんなで不発弾探し再開しよう」とありますが、「高井」はなぜこのようなことを言ったのですか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア このままでは夏休みの自由研究ができず、先生に怒られて、みんなが困ると思ったから。
イ 自分を嫌っている「根岸くん」と仲良くなれるよう、「僕」に助けてほしかったから。
ウ 危険な遊びをする楽しさに目ざめ、何もしていないことにたいくつしてしまっただけから。
エ 友達と遊ぶ喜びをはじめて知り、早く再開して仲間と楽しく過ごしたかったから。

問8 6 「僕は黙ったまま、また種を吹き出した」とありますが、この時の「僕」の気持ちを表すことばとして最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア おもしろい イ 意外だ ウ 不愉快だ エ 悲しい

問9 Ⅰ～Ⅲの意味として最も適当なものを、それぞれ後のア～エから選び、記号で答えなさい。

Ⅰ 拍子抜けする ア 息が抜ける イ 間が抜ける
Ⅱ 後ろめたい ア 油断ができない イ 不安にとらわれる
Ⅲ 鼻が高い ア 得意に思う イ なによりもうれしい
ウ うらやましい エ 周りが気になる

問10 7 「僕はその姿に気づかないフリをして、スピードを落とすと目線をベダルの方へ下げた」とありますが、なぜそのような態度を取ったのですか。解答らんにあてはまるように本文から二十字以内でぬきだして答えなさい。

問11 【A】A、Dに、それぞれ次のア～エをあてはめ、記号で答えなさい。

ア まったく イ いかに ウ つい エ ちよつと

問12 8 「予期せぬ先制パンチ」とはどういうことを指すのですか。二十文字以内で答えなさい。

問13 9 「すねちまって」とありますが、「雄ちゃん」はどういうことに対してすねたのですか。解答らんにあてはまるように本文から十七字でぬきだして答えなさい。

問14 10 「そういう訳」とはどういうことですか。三十文字以内で具体的に説明しなさい。

問15 11 「おばさんの姿」とありますが、これまでに描かれた「おばさん」のようすからうかがえる人物像を説明したものと最も適当なものを次から二つ選び、記号で答えなさい。

ア 強い正義感があり、世の中の不正や悪を絶対に許さない。
イ 息子の微妙な気持ちの動きを察する細やかな面がある。
ウ さっぱりとした気性で、息子に対しても冷静で突き放している。
エ 思いこみが激しく、人の話を聞こうとしないが、こんな面がある。
オ やや短気だが、小さなことにこだわらない大らかさがある。

問16 12 「隠れながら僕を見ている」とありますが、なぜこのようなことをしているのですか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 母親にぶたれるくらいなら仲直りしようとも思うが、まだ決心できずにいるから。
イ 素直に謝れないものの「僕」と仲直りしたい気持ちはあり、気になっっているから。
ウ ひどいことを言った「僕」がどんな顔をして来たのか、こっそり確かめようと思ったから。
エ 「僕」が母親に「オレも悪いんだ」と言っているのを見て、恥ずかしくなったから。

問17 13 「そういう気持ち」とは、「僕」に対する「父」のどういう気持ちを指すのですか。解答らんにあてはまるように三十五文字以内で答えなさい。

問18 14 「次第に苦しくなってきた」とありますが、この時の「僕」の気持ちとして最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア とまどいを感じている。 イ 負担に感じている。
ウ むなしくなっている。 エ 申し訳なく思っている。

問19 15 「親子でばかんだから」とありますが、①これとほぼ同じような意味で「母」が二人のことを語っている部分を本文からぬきだして答えなさい。

② この時の「母」の気持ちとして最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア フミはともかく、とうちゃんは大人なんだから近所迷惑も考えておくれ。
イ 二人とも、いったい何をそこまで意地を張り合っているのかね。
ウ この忙しいのに、二人のせいで仕事ができなくなっちゃったじゃないの。
エ よごれたズボンを洗うのは誰だと思っているんだよ、まったく。

問20 この文章の特徴を説明したものと最も適当なものを次から二つ選び、記号で答えなさい。

ア 貧しくともたくましく生きる人々の姿を、方言をたくみに用いて描いている。
イ ささまざまな登場人物の生き方を、「僕」にこだわらず広い視点から描いている。
ウ 会話を多く用いて、さまざまな登場人物の性格をたくみに描いている。
エ 当時の生活のようすを背景に、伝統的な日本人の生き方を丁寧に描いている。
オ 主人公である「僕」の複雑な思いを、「僕」自身の言葉で細やかに描いている。